Symphony **Lounge**
［シンフォニー・ラウンジ］

旅する マエストロ

ジョナサン・ノットのSeason 2

飯尾洋一
音楽ジャーナリスト
text by Yoichi Iio

音楽監督ジョナサン・ノットと東京交響楽団の旅は、どこへ向かうのか。音楽監督として2年目のシーズンを迎えようとするジョナサン・ノットは、彼らの「シーズン2」のために、意欲的で冒険心にあふれたプログラムを組んでくれた。

ノットは就任時の記者会見の際から、新たなオーケストラで音楽監督に就任することを「旅」にたとえていた。それも行程がきっちりと組まれた予定調和の旅ではなく、どこに到着するのかわからないような旅、積極的にリスクを取って成果を手にする旅であると語られていた。

昨年末、ミューザ川崎シンフォニーホールで開催された2015年度シーズンラインナップ記者発表の席でも、やはりノットは来たるシーズンを自分自身とオーケストラと聴衆による旅と表現した。その旅はいま「シーズン1」を終えて、「シーズン2」へと向かうところに到達したわけだが、ここまでの道のりは期待通りに、いや期待以上に、濃密で充実したものだったのではないだろうか。

旅の第2章とでもいうべき「シーズン2」での選曲にあたって、ノットは「オーケストラと自分の関係をより深くするもの、そして自分が求めている音とその様式等が完成されていくように」考えたという。以下、ノットが指揮する公演を展望してみよう。

ジョナサン・ノット&
東京交響楽団－Season 2－

まずは今年6月6日の定期演奏会では、R・シュトラウスの「メタモルフォーゼン」とブルックナーの交響曲第7番が組合わされる。響きの質という点では対照的な二作品が並ぶ。「メタモルフォーゼン」では、23人の弦楽奏者が緻密なテクスチャーを描き出す。一方でブ

ルックナーでは重厚な響きによって巨大な音楽が構築される。外見的には大きく異なる両者を、ノットは「喪失の悲しみ」という共通項でくくってみせた。「メタモルフォーゼン」では第二次世界大戦末期に老作曲家が抱いた喪失感を、ブルックナー作品では作曲者が敬愛したワーグナーの死に向き合った心情を。ノットのブルックナーといえば、昨年に交響曲第3番「ワーグナー」(初稿)での豊麗な演奏が記憶に新しいが、今月の「パルシファル」を経て、そしてこの交響曲第7番と、ワーグナーで一本の線が表に裏にとつながっているのもおもしろい。

6月14日の名曲全集のプログラムは、R.シュトラウスの「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」とホルン協奏曲第2番(独奏:サボルチ・ゼンプレーニ)、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「ペトルーシュカ」(ピアノ:若林顕)。ここでは中世ドイツのトリックスターであるティル・オイレンシュピーゲルと、命を吹き込まれた人形のペトルーシュカという、二人の奇想天外な登場人物が並置される。物語性に着目した、楽しく華やかなプログラムだ。

7月は対照的な性格を持った2つのプログラムが用意される。ひとつは細川俊夫「循環する海」、ラヴェルの左手のための協奏曲(独奏:萩原麻未)、ドビュッシーの管弦楽のための映像(東京オペラシティシリーズ)。ノットの言葉によれば、「オーケストラの音を水のように使いたい」と考えられたプログラム。もうひとつはストラヴィンスキーの管楽器のための交響曲、バルトークのピアノ協奏曲第1番(独奏:デジュー・ラーンキ)、ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」(定期演奏会および川崎定期)。こちらはリズムや推進力がテーマとなっている。ノットの「運命」とは、意表をついたど真ん中の直球だが、いったいどんなベートーヴェンになるのだろうか。作品を一から見直してアップデートした21世紀の「運命」を期待したい。なにしろ「ベートーヴェンはラッヘンマンにも匹敵するほど現代的」(ノット)なのだから。

9月の定期演奏会および川崎定期ではマーラーの大曲、交響曲第3番が披露される(メゾ・ソプラノ:藤村実穂子、東響コーラス)。ノットはすでに同じマーラーの交響曲第9番、交響曲第8番「千人の交響曲」といった記念碑的な作品に挑んで成果をあげており、あたかもマーラーの大曲を創作史の後ろから遡っているような感がある。交響曲第3番について、ノットは「この曲のアダージョは第9番のアダージョとはまったく違うもの。第3番では曲が平和的に終わるということに意義がある」と語って、作品の性格の違いを述べている。

11月のプログラムはノット色が全開になっている。定期演奏会の曲目はリゲティの「ポエム・サンフォニック」、バッハ〜ストコフスキーの「甘き死よ来たれ」、R.シュトラウスの「ブルレスケ」(ピアノ:エマニュエル・アックス)、ショスタコーヴィチの交響曲第15番。リゲティ作品は100台の機械式メトロノームを一斉に鳴らす作品で、オーケストラのための作品ではないのだが、時を刻みやがて静止する機械音は、ショスタコーヴィチ作品の終結部のパーカッションによって応答される。「生と死」というテーマがうっすらと滲むプログラムだ。

Symphony **Lounge** [シンフォニー・ラウンジ]

旅するマエストロ

── ジョナサン・ノットのSeason_2

同じく11月の東京オペラシティ・シリーズは、モートン・フェルドマンの「ヴィオラ・イン・マイ・ライフII」、バルトークの「弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽」、ドヴォルザークの交響曲第8番の3曲。ノットにとって愛着のある作品が集められているということだが、新しい作品と古典の組合せは、ノットの多才ぶりを存分に伝えるものとなるだろう。

さらなる旅の第2章へ

これまでになんどか足を運んだノットの記者会見で常に感じられたのは、彼が自分の言葉を語るマエストロであるということ。定型的な抱負を述べるのではなく、明快に自らの目標や理想、方法論を語る。セレモニーやルーティーンから遠く、人の耳をひきつけるその様子は、まさに指揮者として作品に向かう態度とも共通する姿勢なのだろう。2015年度シーズンラインナップ記者発表で、もっとも印象深かったのは、直前の「千人の交響曲」リハーサルについて語ったくだりだった。ノットはゲネプロの前のリハーサルで、オーケストラの高いレベルの演奏に感銘を受けた。技術的に磨かれ、音程も正しい美しいマーラー。しかしこれを「少し安全すぎる」と考えたノットは、ゲネプロでは「できるだけ自由に演奏したいと考えて、音楽を動かし、波を作り、突然向きを変えた」。するとオーケストラはばらばらになる。しかしそこに生まれた強さ、集中力こそがノットが求める本当の音楽作りだったという。ノットの音楽観がうかがえる。

綿密な準備、ディテールへのこだわりはもちろんのこととして、最後には本番で、今まさにそこで音楽が生み出されているのだという生々しい興奮や喜びを客席まで伝える。ノットと東京交響楽団がこれから迎える旅の第2章では、またこれまでとは違った風景を私たちに見せてくれることだろう。そして、それはわたしたちの予想を超えたものであるにちがいない。これは行先のわからない旅なのだから。